

街並み生い立ち 街歩き

港町横浜と佐世保

都市デザイナー

西脇 敏夫

〈佐世保編〉

「街並み生い立ち 街歩き」 執筆テーマ

- ① 街並みの生い立ちを歩く
（横浜編）
- ② 大通り公園
- ③ 都心プロムナード
- ④ くすのき広場と横浜市庁舎
- ⑤ 横浜公園と日本大通り
- ⑥ 日本大通りの建物たち
- ⑦ 開港広場
- ⑧ 山下公園通り
- ⑨ 横浜人形の家
- ⑩ 元町、中華街、馬車道、伊勢佐木町
- ⑪ 港の見える丘公園周辺
- ⑫ 外国人墓地、元町公園周辺
- ⑬ 「山手公園」「山手イタリア山庭園」周辺
- ⑭ 歴史を生かしたまちづくり
（佐世保編）
- ⑮ 美しい西海の自然に抱かれた街
- ⑯ させぼ大通りに沿って
- ⑰ 佐世保川に沿って
- ⑱ 三ヶ町・四ヶ町・五番街に沿って
（テーマは予定です。変更となる場合もあります）

16. させぼ大通りに沿って

日本最西端のJR駅

今回は港に面した新しい街にある「佐世保駅」の東口からスタートし、3本の都市軸の一つ「させぼ大通り（国道35号）」に沿って、明治時代の中心街だった「市役所」周辺までの街歩きです。「佐世保駅周辺再開発」で誕生した新しい街は、市民公募により道路、公園などに愛称がつけられました。「させぼ大通り」は「国道35号」の愛称です（写真1）。



写真1 「させぼ大通り（国道35号）」。
右に「三浦町カトリック教会」

鉄道の高架化によって生まれ変わった「佐世保駅」は、JRと松浦鉄道（MR）二つの鉄道の高架駅として2001（平成13）年にオープンしました。JRの日本最西端の駅です。海側の「みなと口」と街側の「東口」を結ぶ広いコンコースが設けられ、自由に通り抜けが出来るようになりました。以前の駅舎の位置は、現在よりも50mほど国道側にあつて、駅前広場の奥行きは狭かったのですが（写真2）、新しい「東口」の駅前広場には、ゆったりとした歩行者用スペースが設けられ（写真3）、南北方向の街に通ずる歩行者専用道路がつながります。

「佐世保駅」は1898（明治31）年に「九州鉄道」の駅として開業しました。1907（明治40）年に国有化され、国鉄「佐世保線」の終点駅でしたが、1935（昭和10）年に国鉄「松浦線」の



写真2 「佐世保駅」旧駅舎と国道。港側に高架の新駅舎が完成している（佐世保市パンフレットより）



写真3 「佐世保駅」新駅舎と東口駅前広場。
手前が国道、駅の向こうに港

「北佐世保駅」へ延伸され中間駅になりました。

1937（昭和12）年に木造から鉄筋コンクリート2階建てに改築され、戦災を免れて今回高架化されるまで使用されていました。前線へ向かう兵隊が集結する駅として賑ったそうです。

1955（昭和30）年、戦災復興計画により国道が36mに拡幅される際、国道の反対側に「市バスターミナル広場」が整備されました。駅前との間を当時は全国的に珍しかった地下街で結ばれましたが、今回の再開発事業に伴い廃止されて店舗の一部は駅の高架下へ移転しています。「市バス広場」も改装され、長年大きな変化のなかった駅前の風景が一変しましたが、「市バス広場」にあった大きなフェニックスが駅側広場に移植されて、わずかに面影の一端を残しています。「市バス広場」の横の1985（昭和60）年に再開発で誕生したビルには、ホテルと長距離高速バスなどが発着する「佐世保バスセン



写真4 駅前広場から「烏帽子岳」方面を見る。右手が「佐世保バスセンター」があるビル

ター」があります。背後には「烏帽子岳」とその麓の住宅地が広がります(写真4)。

三浦町カトリック教会・純心女子学園聖心幼稚園

「させば大通り」を少し行くと、右手に3つの尖塔を持つ「三浦町カトリック教会」が目に入ります(写真5)。1931(昭和6)年に現在地に建てられた鉄筋コンクリートの建物ですが、それ以前は「市役所」に近い場所にあったそうです。高い擁壁の上に聳えていて「佐世保駅」周辺のランドマークとなっています。第二次世界大戦中は空襲を避けるために外壁が黒一色に塗られたそうですが、この付近の国道沿いを含め、港の周辺一帯は戦災に遭わずに済みました。現在のように高層ビルがなかった頃は、ここから港が一望出来たことでしょう。



写真5 ライトアップされている「三浦町カトリック教会」

教会の裏には附属施設として1930(昭和5)年に建てられた「純心女子学園聖心幼稚園」があります(写



写真6 「純心女子学園聖心幼稚園」

真6)。建物の設計は、長崎県を中心に数々のカトリック教会を手掛けた鉄川与助です。

アルカスSASEBO

教会のはす向かいにある建物で、2000席の大ホールや中ホールなどがある「県民文化ホール」と、市の「地域交流センター」が入る文化施設です(写真7)。「佐世保駅周辺再開発」の中の目玉施設として建設され、2001(平成13)年にオープンして、オーケストラやオペラなどの音楽会をはじめ様々な文化活動に利用されています。



写真7 「アルカス SASEBO」

戸尾交差点の不思議

「戸尾(とのお)交差点」に来ると、道路の真正面は「させば四ヶ町」と書かれた商店街のゲートに突き当たります。「させば大通り」はここで大きく右に曲がっています。開港時より計画的に造られていた格子状の道路網が、どうしてここで斜めに曲がったのでしょうか(写真8)。

日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦などを経て都市化が進み、開港



写真8 「戸尾交差点」。真正面は「させば四ヶ町商店街」、国道は右手に曲がる

以来の幹線道路であった幅員8m程の旧「本通り(現在のアーケード街)」の人や車の交通量が増えてきました。この通りは軍事上、産業上非常に重要な道路のため拡幅する必要に迫られました。しかし多くの建物が建ち並んでいたために、1929(昭和4)年に旧「本通り」の東側に平行する旧「弥生座通り」を拡幅して「海軍鎮守府」までの広幅員道路が計画され、国営事業となりました。(コラム参照)

1933(昭和8)年に旧「本通り」と旧「弥生座通り」を、この交差点から斜めに結ぶ工事を市と県が行い、翌年から1945(昭和20)年までの12年をかけて順次旧「弥生座通り」と旧「海軍通り(現在の国際通り)」、そして旧「海軍橋(現在の佐世保橋)」の拡幅工事が国と県により進められました。

この一大道路事業によって中心街の車と歩行者の大きな振り分けが行われ、旧「弥生座通り」は現在の「国道35号」となり、旧「本通り」は通過



写真9 中央のアーケード街の先の「戸尾交差点」で国道が曲がっている。右に「佐世保川」(佐世保市提供)

コラム

港町への生い立ち 2

都市への変身

1894(明治27)年の「日清戦争」から1904(明治37)年の「日露戦争」の間に、佐世保は大きく変貌しています。この10年間に人口が約5万人余り増加し、1902(明治35)年には村から町を飛び越え市政が布られました。

そして船渠、船台、火薬庫、石炭庫、岸壁、水道、倉庫などが次々と建設され、明治から大正にかけて行われた大工事は佐世保港の姿を大きく変えました。現在も数多く残っている赤レンガ倉庫などレンガを使用した施設は、この時期の前後に多くが造られています。

1898(明治31)年には、鉄道が開通して「佐世保駅」が設置され、駅

付近の一帯の海面埋立が行われて海陸交通の中心として佐世保の表玄関となりました。それにつれて市街地も南へ延び、駅前の斜面一帯の地域まで市街地が広がってきました。一方、西や北の方面にも市街化が進んでいきました。

明治の末頃は、市街地の中心が現在の「市役所」周辺の地域から、南の「三ヶ町」周辺の方へ移った頃で、銀行や大きな商店がこの地域に集まって新しい繁華街になりました。

1906(明治39)年に旧「海軍橋」がコンクリート橋になり、1910(明治43)年には新市庁舎が開庁しています。そして明治末には電話、電力、水道が、大正初期にはガス灯がついています。しかしその後

は不景気が続きました。

1914(大正3)年に始まった第一次世界大戦が終了する頃まで人口の流入は続き、市域には入れない人が周辺地域に拡がり、鉄道、道路、航路が整備されています。1916(大正5)年に「駅裏」一帯が商港になりました。「烏帽子岳」「弓張岳」の麓には住宅が増え、約4メートル幅の道路が延びていきました。

1919(大正8)年に都市計画法が制定されたのをきっかけに、市は市街地の拡大に伴う道路整備の計画を立て、1929(昭和4)年に中央部を走る幅員20mの幹線道路と枝線の計画がつけられました。これが現在の都市軸の形成につながります。大正時代は、佐世保が都市に変身した時代とも言われています。

交通から解放されて、現在では「アーケード街」になっています。現在の中心市街地の骨格となる「車の軸線」と「歩行者の軸線」はこうして誕生しました(写真9)。

五島まで海を渡る道路

「戸尾交差点」から左に曲がる道は「国道384号」です。この道は僅か500m程行くと、「佐世保川」河口に突き当たってしまいます。対岸は米軍基地です(写真10)。実は「五島列島」の「国道384号」まで海を隔ててつながる道路なのです。日本一離

島の数が多い長崎県ならではの道です。

戸尾市場街、とんねる横丁

「戸尾交差点」の先に「戸尾市場街」と書かれたゲートがあります。古くから市民の台所として親しまれてきた市場で、複数の市場が集まって海産物、水産加工品、青果、飲食店などが軒を並べています。市場の懐かしい雰囲気もあって広く知られるようになり、遠くからの観光バスも立ち寄っていました(写真11)。

その一つの「とんねる横丁」は、戦後、元「戸尾小学校」下に掘られた防空壕跡を利用した店舗が連なっています。「とんねる横丁」が面する通りが、旧「弥生座通り」になります(写真12)。



写真12 元「戸尾小学校」下にある「とんねる横丁」。前面の道が旧「弥生座通り」



写真10 「国道384号」。高架橋をくぐると正面が米軍基地、背後は「赤崎岳」



写真11 「戸尾市場街」

交差点物語

「上京町交差点」「本島(もとしま)町交差点」の右手に行くと、「小佐世保川」沿いに形成されたかつての繁華街を抜け「烏帽子岳」へ行けます。左手に行くと「夜店公園地区」を抜けて

港へ行きます。

松浦鉄道の鉄橋を過ると、左手に「島瀬(しまのせ)公園」の緑と「佐世保市博物館島瀬美術センター」の搭状の建物があり(写真13)、右手の「名切(なきり)川」沿いに「市立図書館」があります(写真14)。その先には、2011(平成23)年まで「佐世保エクラン東宝」という映画館がありました。1897(明治30)年創設の芝居など大衆娯楽の殿堂「弥生座」があった場所で、かつては道路の通り名にもなりました。



写真13 「島瀬公園」。背後に「親和銀行」、右が「島瀬美術センター」



写真14 「名切川」沿いの「市立図書館」

次の「名切交差点」の右手は、周辺の街とは一変してケヤキ並木の道と「中央公園」の緑豊かな光景が広がり、春は桜の名所、秋には紅葉の美しい四季を感じる事の出来る市民の憩いの場所になっています(写真15)。戦前は、海軍士官の住宅地や花園遊郭を控えた繁華街だったそうですが、戦災に遭い、戦後は付近一帯が接収され米軍住宅地として使用されていました。返還されて「中央公園」「市立図書館」「市民会館」などに利用されています。



写真15 「中央公園」と名切の通り。背後は「烏帽子岳」に続く山並み

次の「松浦町交差点」から左手の「国際通り」に入ると、「米軍基地」や「海上自衛隊佐世保地方総監部」につながります。「国際通り」は次回に歩きます。

「谷郷(たにごう)町」「天満(てんま)町」の交差点を左に曲がると、佐世保発祥の地「元町」方面です。「天満町交差点」は「西海国立公園」の「弓張岳」の入口です。

「高砂町」の交差点は「中央保健福祉センター」への入口になります。

佐世保市役所周辺

その先に「佐世保市役所」があります。ひと際高く白い建物は「させば大通り」のランドマークになっています(写真16)。この「市役所」を中心に官庁街が形成されています。開港から明治時代の後半は、この付近一帯が佐世保の中心でした。国道の反対側には、開港以前よりある「西方寺」と「八幡宮」があります。

「市役所」は、開港当時は村役場として旧「元村(当時は佐世保浦)」にありましたが、その後市制施行の



写真16 国道の正面に「佐世保市役所」、背後は「弓張岳」に続く「将冠岳」

1902(明治35)年には「谷郷町村役場」を仮庁舎に充てた後現在地に移り、1910(明治43)年に青ペンキ塗りの木造2階建ての新市庁舎になりました。1934(昭和9)年に鉄筋コンクリート4階建てに建替えられましたが戦災で内部を全焼し、補修をして使用していましたが、1974(昭和49)年に現在の建物になりました。

2002(平成14)年、佐世保川をはさんではす向かいにあった「税務署」用地に、市内に分散していた様々な国の機関を集約して「佐世保合同庁舎」が完成しています。レンガタイル張りの柱型と打ち放しの梁型仕上げの建物で、川側の敷地にあった大きな桜の並木が保存され、川沿いの桜並木とともに往年の景観を残しています。

そして2009(平成21)年の「保健福祉センター」と駐車場ビルの建て替えを機会に、官庁街の歩行者空間の整備が計画されました。国道沿いの「市役所」「水道局」、川沿いの「保健福祉センター」「高砂駐車場」「木場田(こばた)公園」「佐世保合同庁舎」そして「県北振興局総合庁舎」などを結ぶ道は、3本の都市軸を横につなぎ集束する道でもあります。ここを中心に歩行者優先の道が整備されました。国道のバスタップとの直接的なアクセスを図り、川沿いに新たに歩行者用の道を整備するなど、歩行者空間による街の再構成が行われました(写真17)。



写真17 「市役所」と「保健福祉センター」の間の歩行道。その先に佐世保川沿いの「合同庁舎」と「県北振興局」